オーディオ実験室収載

Garrard 401 の再構成(17)
—カートリッジの交換(2)—

１．はじめに

前報(16)において Garrard 401 のカートリッジを以前使用していた Ortofon Royal N に戻しており、今回はフォノイコライザーを替えてみます。

２．Garrard 401 の再構成の試聴方法

今回は、カートリッジは前報(16)のとおり Ortofon Royal とし、フォノイコライザーを 47 研 4718 から Maraz7 タイッププリに交換します。

ターンテーブルアキュライザーやダンパーフレークやアースラインの使用は前報(16)と同様です。Garrad401、My Sonic Stage 1030、Maraz7 タイッププリのアースラインには、Crystal E を接続しています。Maraz7 タイッププリのアースは、Crystal E はアース端子ではなく、Crystal E の付属ケーブルで RCA ライン入力端子に接続しています。

Garrad401→My Sonic Stage 1030→Maraz7 タイッププリ→TruPhase

試聴音源は、前報(16)と同様、下記を使用しました。

LONDON SLC 1138
　ファリャ　三角帽子
　アンセルメ指揮スイスロマンド
ARCHIV(日本ポリドール)　28MA 0020
　J.S.Bach　チェンバロ協奏曲
　トレヴァー・ピノック指揮イングリッシュコンサート
harmonia mundi (Deutche)　KUX-3248-H
　ミトマニア
　ベーレン・ゲスリン
キングレコード SKA-104
　愛と自然の歌
　倍賞千恵子

３．Garrard 401 の再構成の試聴結果

Ortofon Royal N は、Ortofon のカートリッジのなかでは、もっとも繊細な表現が可能ですが、ゲインが小さく、管球式のプリアンプを使用していることもあり、ハムが乗りやすく使いにくいところがありました。それがどのように克服されている

かが焦点です。
三角帽子は、これまでより打楽器や拍手などの音の立ち上がりがよくなり、オーケストラやベルガンサの定位や奥行き感が向上しています。
チェンバロ協奏曲は、これまでより音が緻密になり、チェンバロの繊細な表現やバロックアンサンブルの音の抜けも向上しています。
ミトマニアは、これまでよりボーカルの抜けがよくなり、バックの中世の古楽器の質感も明瞭になっています。
倍賞千恵子は、管球プリのフォノイコライザーらしく伸び伸びと屈託がなく、歌唱の表現もソフトな印象で細かいニュアンスが出ています。
以上により、管球プリのフォノイコライザーの音質を楽しむため、当面この状態を保持しておきます。

４．まとめ

Ortofon Royal N はゲイン不足で苦労してきましたが、ターンテーブルアキュライザー、ダンパーフレーク、Crystal E などの導入の結果、ゲインも問題なく、ハムもあることはありますが、気にならない程度に収まり、Garrado401 のシステムとしては、My Sonic Stage 1030 の優秀な性能と管球式の Maraz7 タイッププリのソフトな音調がマッチして、Ortofon Royal N らしいソフトな音調での細かい表現が活かされています。

以上